

わかれ

国木田独歩

青空文庫

わが青^{わかもの}年の名を 田宮^{たみや}峰^{みね}二郎^{じろう}と呼び、かれが住む茅屋^{くさや}は丘の半腹にたちて美^{うる}わしき庭
 これを囲み細き流れの北の方^{かた}より走り来て庭を貫きたり。流れの岸には紅楓^{もみじ}の類を植^いえそ
 のほかの庭樹^きには松、桜、梅など多かり、栗樹^{くり}などの雑^{まし}わるは地^{とち}柄^{がら}なるべし、——区何
 町の豪商が別荘^{とま}なりといえど家も古び庭もや荒れて修繕^{つくろ}わんともせず、主人^{あるじ}らしき人の
 車その門に駐^{とま}りしを見たる人まれなり、売り物なるべしとのうわさ一時は近所^{あたり}の人の間に
 高かりしもいつかこのうわさも消えて跡^{あと}なく、ただ一^{ひと}年半^{とせ}ば以前よりこの年若き田宮の
 来たり住みつ。

年は二十^{はたち}を越ゆるようやく三つ四つ、背高く肉やせたり、顔だち凜^{りり}々しく人柄も順良^{すなお}に
 見ゆれどいつも物案^いじ顔に道ゆくを、出^いであうこの地の人々は病める人ぞと判じいたり。
 さればまた別荘^{ひと}に独^{ひと}り住むもその故^{ゆえ}ぞと深くは怪しまざりき。終^{ひねもす}日家^{ひねもす}にのみ閉じこもる
 ことはまれにて朝に一度または午後^{あたり}に一度、時には夜に入りても四辺^の野路^{のみち}を当てもなげ
 に歩み、林の中に分け入りなどするがこの人の慣らいなれば人々は運動のためぞと、しか
 るべきことのようにうわさせり。

されどこの青^{わかもの}年と親しく言葉かわす人なきにあらず。別荘と畑一つ隔たりて牛乳屋^{ちちや}あ

り、櫛かしの木に取り囲まれし二棟ふたむねは右なるに牛七匹住み、左なるに人五人住みつ、夫婦に
 こともふたりひとり、一人の雇男おとこは配達人はいたつなり。別荘かしらへは長男わらべの童が朝夕二度の牛乳ちちを運べば、青わかも
 小供二人、一人の雇男おとこは配達人はいたつなり。別荘かしらへは長男わらべの童が朝夕二度の牛乳ちちを運べば、青わかも
 年のいつしかこの童と親しみ、その後は乳屋ちちやの主人あるじとも微笑ほほえみて物語するようになりぬ。

されど物語はなしの種たねはさまざま多からず、牛の事、牛乳ちちの事、花客とくいさき先のうわさなどに過ぎざり
 き。牛乳屋ちちやの物食ものくう口は牛七匹と人五人のみのように言いしは誤謬あやまりにて、なお驢馬ろば一頭
 あり、こは主人あるじがその生ふるさと国千葉ちばよりもないうという、この家やには理由わけある一物ものなるが、
 主人あるじ青年わかものに語りしところによれば千葉ちばなる某なにかしという豪農ごうのうのもとに主人あるじ使われし時、何か
 の手柄てにて特に与えられしもの由なり。さまざま美しというにあらねど童には手ごろの生
 き物ものゆえ長かしらの児こが寵ちようあい愛あいなおざりならず、ただかの青年わかものにのみはその背を借すことあ
 り。青年わかものは童の言うがまにまにこの驢馬ろばにまたがれど常に苦笑くわくごいせり。青年わかものには童が
 この兎うさぎ馬うまを愛めずるにも増して愛めで慈いつくむたくましき犬いぬあればにや。

庭を貫く流れは門かどの前を通ずる路みちを横よこぎりて直ちに林に入り、林を出ずれば土地にわか
 にくぼみて一軒くさやの茅屋くさやその屋根のみを現みわし水車みずぐるまめぐれり、この辺あたりには水車場すいしやば多
 し、されどこはいと小さき者の一つなり、水車場みずぐるまを離れて孫屋まごや立ち、一ひと抱かかえばかりの櫛かし
 七株八株一列に並びて冬は北の風を防ぎ夏は涼しき陰もてこの屋をおおい、水車場みずぐるまとこの

屋との間を家鶏にわとりの一群れゆききし、もし五月雨降さみだれりつづくころなど、荷物曳ひける駄馬だば、水車場の軒先に立てば黒き水は蹄ひづめのわきを白き藁わら浮かべて流れ、半ば眠れる馬の鬣たてがみよりは雨滴しずく重く滴したたり、その背よりは湯気立ゆげちのぼり、家鶏にわとりは荷車の陰に隠れて羽翼はね振るうさまの鬱陶うつとうしげなる、かの青年わかものは孫屋の縁先に腰かけて静かにこれらをながめそのわきに一人の老翁腕おきなこまねきて煙管きせるをくわえ折り折かたみに何事かを語りあいては微笑ほほえむ、すなわちこの老翁おきなは青年わかものが親しく物言う者の一人なり。

水車場を過ぎて間もなく橋あり、長さよりも幅のかた広く、欄の高さは腰かくるにも足らず、これを渡りてまた林の間を行けばたちまち町の中ほどに出いず、こは都にて開かるる洋画展覧会などの出品の中うちにてよく見受くる田舎町いなかまちの一つなれば、茅屋くさやと瓦屋かわらやと打ち雑ましりたる、理髪所とこやの隣に万屋よろずやあり、万屋の隣に農家あり、農家の前には蕙敷むしろきて童わらべと猫こと仲よく遊べる、茅屋の軒先には羽虫はむしの群れ輪をなして飛ぶが夕日に映りたる、鍛冶かじの鉄かなしき砧しの音高く響きて夕闇ゆうやみに閃く火花の見事なる、雨降る日は二十ばかりの女何事をかかしましく叫びつ笑いて町の片側より片側へとゆくに傘かさささず襟えり頸くびを締め駒下駄こまげたつまだてて飛ぶごとに後ろ振り向くさまのおかしき、いづれかこの町もかかる類たぐいに漏るべき、ただ東より西へと爪先つまさき上がりの勾配こうばいゆるく、中央をば走り流るる小川ありて水上みなかみは別荘

を貫く流れと同じく、町人はみなこの小川にてさまぎまのもの洗いすすげど水のやや濁れるをいとわず、流れには板橋いくつかかかりて、水際には背低き楓をとこどころに植えたる、何人の思いつきにや、これいささかよそその風情をことにせり。町の西端に寺ありてゆうべゆうべの鐘はここより響けど、鐘撞く男は六十を幾つか越えし翁なれば力足らず絶えだえの音は町的一端より一端へと、おぼつかなく漂うのみ、程近き青年が別荘へは聞こゆる時あり聞こえかぬる時も多かり。この鐘の最後の一打ちわずかに響きおわるころ夕煙巷をこめて東の林を離れし月影淡く小川の水に碎けそむれば近きわたりの騎馬隊の兵士が踵に届く長剣を左手にさげて早足に巷を上りゆく、続いて駄馬牽く馬子が鼻歌おもしろく、茶店の娘に声かけられても返事せぬがおかしく、かなたに赤児の泣き声きこゆればこなたには童が吹くラツパの音かしましく、上る兵士は月を背にし自己が影を追うて急ぎ、下の少女は月さやかに顔を照らすか面恥ゆく、かの青年が林に次ぎてこの町を愛ずるも理なきにあらず。昨日の事は忘れ明日の事を思わず、一日一日をみだらなる楽しみ、片時の慰みに暮らす人のさまにも似たりとは青年がこの町を評する言葉にぞある。青年別荘に住みてよりいつしか一年と半ばを過ぎて、その歳も秋の末となりぬ。ある日かれは朝早く起きいでて常のごとく犬を伴い家を出でたり。灰色の外套長く膝をおお

い露を避くる長靴は膝に及び頭にはめりけん帽の縁広きを戴きぬ、顔の色今日はわけて蒼白く目は異しく光りて昨夜の眠り足らぬがごとし。

門を出ずる時、牛乳屋の童にあいぬ。かれは童の手より罎を受け取りて立ちながら飲み、半ば残して童に渡せば、童これを掌にうつしては犬に与う。青年の目は遠く大空のかなたに向かえり。空は雨雲ひくく漂い、木の葉半ば落ち失せし林は狭霧をこめたり。

青年は童に別れ、独り流れに沿うて林を出で、水車場の庭に入れば翁一人、物案じ顔に大空を仰ぎいたり。青年の入り来たれるを見て軽く礼なしつ、孫屋の縁先に置かれし煙草盆よりは煙真直にたちのぼれり。君が今朝の装衣はと翁まず口を開きてやや驚けるようなり。青年は言葉なく縁先に腰かけ、ややありて、明日は今の住家を立ち退くことに定めぬと青年は翁が問いには答えず、微笑みてその顔を守りぬ。そはまたいかにしてと翁はいよいよ驚けるように目をみはりたり。されどまた七日の後には再び来たりておもむろに告別せんと青年は嘆息つきて深く物を思えるさまなり、翁ははたと手を拍ち、しからばいよいよ遠く西に行きたもうこととなりしか。否、西にあらず、まず東に行かん、まずアメリカに遊ぶべし、それよりイギリスに、その後はかねて久しく望みしフランスイタリヤに。これを聞きて翁の目は急に笑みをたたえ、父上もさすがにこの度は許したまい

しか、まずまずめでたし、いつごろ立ちたもうや。月つき末すえなるべしと青年は答え、さればこの地もまたいつ帰り来て見んことの定め難く、また再び見ることかなうまじきやこれまた計り難ければ、今日は半日この辺りあたを歩みて一年と五月の間、わが慰めとなり、わが友となり、わが筆を教え、わが情こころを養いし林や流れや小鳥にまでも別れを告げばやとかくは装衣いでたちぬ、されど翁にはひとまず父の家に帰よろずりて万事の仕度したくを終えし後、また来たりておもむろに別れを述べんと言いつつ青年は身を起こして庭に立ち、軽く礼いして立ち去らんとす。翁はただ微笑ほほえむのみ、何の言葉もなく青年を打ちまもりつ。

青年の出いで行きし後、翁は庭の中をかなたこなたと歩み、めでたしめでたしと繰り返して独ひとりご言ちしが、ふと足を止め、眼まなこを閉じ、ややありて、されど哀れの君よと深き嘆息ためいきをもらしぬ。

青年わかものは水車場を立ち出でてそのまま街ちまたの方へと足を転めぐらしつ、節々おりおり空を打ち仰あぎたり。間もなく巷ちまたに出いでぬ。

朝あさなお早ければ街ちまたはまだ往来ゆきき少なく、朝餉あさげの煙重く軒より軒へとたなびき、小川の末は狭霧さぎり立ちこめて紗絹うすぎぬのかなたより上り来る荷車にぐるまの音はさびたる街ちまたに重々しき反響かえりを起こせり。青年は橋の一にたたずみて流れの裾すそを見下ろしぬ。紅くれないに染め出いでし楓かえでの葉末かに凝こ

る露は朝日を受けねど空の光を映して玉のごとし。かれは意にもなく手近の小枝を折り、真紅の葉一つを摘みて流れに落とせば、早瀬これを浮かべて流れゆくをかれは静かにながめて次の橋の陰に隠るるを待つらんごとし。

この時青年の目に入りしはかれが立てる橋に程近き楓の木陰にうづくまりて物洗いたる女の姿なり。水に垂れし枝は女の全身を隠せどなおよくその顔より手先までを透かし見らる。横顔なれば定かに見分け難きも十八、九の少女なるべし、美しき腕は臂を現わし、心をこめて洗うは皿の類なり。

少女は青年に気づかざるように、ひたすらその洗う器を見て何事をも打ち忘れたらんとし。幾個かの皿すでに洗いおわりて傍らに重ね、今しも洗う大皿は特に心を用うるさまに見ゆるは雪白なるに藍色の縁とりし品なり。青年が落とせし楓の葉、流れて少女の手もと近く漂いゆくを、少女見てしばし流れ去るを打ちまもりしが急に手を伸ばして摘み、皿にのせて傍らに置きぬ。葉は水に湿いていよいよ紅に、真白の皿に置かれしさまは画めきて見ゆ。この時青年は少女の横顔の何者にか肖たるように覚えしも思い出ださざりき。ただ耳より腮にかけし肉づきはかれの画心を惹く殊に深かりしのみ。

由なき戯れとは思いつつも、少女がかれに気づかぬを興あることに思いしか、はた真白

の皿くれないこに紅の木の葉拾いのせしふるまいのみやびて見えつるか、青年はまた楓の葉を一つ摘みて水に投げたり。木の葉は少女おとめの手もとに流れゆきぬ、少女は直ちに摘まみてまたかの大皿おおざらにのせたり。しかし今洗うは最後の品なり。

こたびは青年手に持ちし小枝をそつと水に落とせば、小枝は軽く浮かびて回転めくりつつ、少女おとめの手もと近く漂いぬ。少女は直ちにこれを拾い上げて、紅の葉くれないごとに水の滴したたり落つるを見てありしがまたかの大皿にのせ、にわかになつて振るものごとく振り向きたり。青わかも年の目と少女おとめの目と空そらに合あひし時、少女はきとその面かおを赤らめ、しばしはためらいしが急に立ちあがりかの大皿のみを左手ゆんでに持ちて道にのぼり、小走りに駆け入りしは騎馬隊の兵士が常に集まりて酒飲むこの街唯一ちまひいつの旗亭なり。少女は軒下にて足を停とどめ、今一度青年の方を見たり。

今こそ思い出いでぬ、今の少女の顔のよく肖にたりというはわが治子はるこなるを。げに治子の姉は妹ちまひなりと言わんもわれいかでたやすく疑い得うべき、ことに最初わが方を振り向きし時のまなざしは治子のと少しも違たがわず、かの美しき目とかくまでに相肖にたる眼まなこを持つ少女おとめのまた世にあらんとは思わざりしに。

されどこれもまたわが心の迷いなるべきか、われ治子を恋うる心の深きがゆえなるべき

か。かく思いつづけて青年が手はポケットの中なるある物を握りつめたり、その顔にはしばらく血の上るようなりしが、愚かなると言いし声は低ければ杖もて横の欄打ちし音は強く、足下なる犬は驚きて耳を立てたり。たちまち顔は常の色に復りつ、後をも見ずして静かに街をのぼり往きぬ。

犬はかれに先立ちて街を駆けのぼり早くあなたにありて青年を待てり。登りつむればここは高台の見晴らし広く大空澄み渡る日は遠方の山影鮮やかに、国境を限る山脈林の上を走りて見えつ隠れつす、冬の朝、霜寒きころ、銀の鎖の末は幽なる空に消えゆく雪の峰など、みな青年が心を夢心地に誘いかれが身うちの血わくが常なれど、今日は雲のゆきき早く空と地と一つになりしようにて森も林もおぼろにかすみ秋霧重く立ちこむる野面に立つ案山子の姿もあわれにいずこともなく響く銃の音沈みて聞こゆ。青年はしばし四辺を見渡して停止みつおりおり野路を過る人影いつしか霧深き林の奥に消えゆくなどみつめたる、もしなみなみの人ならば鬱陶しとのみ思わんも、かれは然らず、かれが今の心のさまとこの朝の景色とは似通う節あり、霧立ち迷うておぼろにかすみ森のさまは哀れに物悲し、これ恋なり。されどその幻に似て遠きあなたに浮かべるさまは年若き者の夢想を俤にして希望という神の住みたもうがごとく、青年の心これに向かいてはただ静

かに波打つのみ。

林の貫きて真直ますくに通う路あり、車もようよう通い得るほどなれば左右の梢こずえは梢と交わり、夏は木の葉をもるる日影鮮やかに落ちて人の肩にゆらぎ、冬は落ち葉深く積みて風吹く終よ夜物すぐらのささやく音す。一年ひととせと五月いつつきの間にかれこの路を往来ゆききせしことを幾度たびぞ。この路に入りては人にあうことまれに、おりおり野菜たぐいの類を積みし荷車ならずば馬上まぎたはこ巻煙草まきたばこをくわえて並み足に歩ませたる騎兵にあうのみ。今朝けさもかれはこの路を撰えらびてたどりぬ。路の半ばに時雨しぐれしめやかに降り来たりて間もなく過ぎ去りし後のちは左右そうの林の静けさをひとしおに覚え、かれが踏みゆく落ち葉の音のみことごとしく鳴れり。この真直ますくなる路の急に左に折るるところに立ち木や疎まばらなる林あり。青年わかものはかねてよくこの林の奥深く分け入り、切り株などに腰かけて日の光と風の力とに変わりゆく林の趣をめて楽しみたりければ、犬もまたこの林になずみけん、今日も先に立ちて走り入りぬ。

木の葉半ば落ちて大空の透かし見らるる林を秋霧立ちこむる朝訪とわばいかに心騒がしき人もわれ知らず四辺あたりの静けさに耳そばたつるなるべし。世の巷ちまたに駆けめぐる人は目のみを鋭く働かしめて耳を用いざるものなり。衷心うち騒がしき時いかで外界そとの物音を聞き得ん。

青年の心には深き悲しみありて霧のごとくかかれり、そは静かにして重き冷霧なり。か

れは木の葉一つ落ちし音にも耳傾け、林を隔てて遠く響く轍の音、風ありとも覚えぬに私語く枯れ葉の音にも耳を澄ましぬ。山鳩一羽いずこよりともなく突然程近き梢に止まりしが急にまた飛び去りぬ。かれが耳いよいよさえて四辺いよいよ静寂なり。かれは自己が心のさまをながむるように思いもて四辺を見回しぬ。始めよりかれが恋の春霞たなびく野辺のごとかるべしとは期せざりしもまたかくまでに物さびしく物悲しきありさまになりゆくべしとは青年今さらのように感じたり。

かれに恋人あり、松本治子とて、かれが二十二の時ゆくりなく相見て間もなく相思うの人となりぬ。十年互いに知りてついに路傍の石に置く露ほどの思いなく打ち過ぐるも人と人との交わりなり、今日見て今夜語り、その夜の夢に互いに行く末を契るも人と人との縁なり。治子がこの青年を恋うるに至りしは青年が治子を思うよりも早く、相思うことを互いに知りし時は互いの命は互いの心に取りかわして置かれぬ、これ相見てより一月とは経たざる間の事なり。親々はこの恋を許さざりき、その故はと問わば言葉のかずかずもて許し難き理由を説かんでも、ただ相恋うるが故にこの恋は許さじとあからさまに言うの直截なるにしかず。物堅しといわるる人々はげにもと同意すべければなり。げにそのごとくなりき。かくて治子は都に近きその故郷に送り返され、青年は自ら望みて伯父

なる人の別荘に独居し、悲しき苦しき一年を過ぐしたり。

青年は治子の事を思い絶たともがきぬ、ついに思い絶ち得たりと自ら欺きぬ。自ら欺けるをかれはいつしか知りたれど、すでに一度自ら欺きし人はいかにこれを思い付くともかいなく、かえつてこれを自ら誇らんとするが人の情の怪しき作用の一つなり。そこには必ず一個の言いわけあるものなり。この青年はわれに天職ありと自ら約せり。この約束を天の入れたもうや否やは問うところにあらず。

かれは文学と画とを併せ学び、これをもつて世に立ち、これをもつてかれ一生の事業となさんものと志しぬ、家は富み、年は若し。この望みはかれが不屈の性と天稟の才をもつてしては達し難きものにあらず。かれはこれを自信せり。一年の独居はいよいよこの自信を強め、恋の苦しみと悲しみとはこの自信と戦い、かれはついに治子を捨て、この天職に自個を捧ぐべしと自ら誓いき。後の五月はこの誓いと恋と戦えり。しかしてかれ自ら敗れ、ついに遠く欧州に走らばやと思ひ定めき。最初父はこれを許さざりしも急にかれの願いを入れて一日も早く出立せよと命ずることくに促しぬ。

昨夜治子より手紙来たり、今日午過ぎひそかに訪問れて永久の別れを告げんと申し送れり。永久の別れとは何ぞ。かれの心はかき乱されぬ。昨夜はほとんど眠らざりき。行

く末のかれが大望たいもろうは霧のあなたに立ちておぼろながら確かにかれの心を惹ひき、恋は霧のごとく大望を包みて静かにかれの眼前めのまえに立ちふさがり、かれは迷いつ、怒りつ、悲哀かなしみと激昂げつこうとにて一夜ひとよを明かせり。明けがた近くしばしまどろみしが目さめし時はかれの顔真まつ蒼さおなりき。憂うれえも怒りも心の戦いくさいもやみて、暴風一過、かれが胸には一片の秋雲凝なつて動かうごかず。床とこにありていずこともなく凝視みつめし眼まなこよりは冷ややかなる涙なみだ、両ふたの頬ほおをつたいて落ちぬ。『ああ恋しき治子よ』と叫こゑびて跳はね起きたり。水車場の翁おきなはほぼかれが上を知れるなり。

この時ときまたもや時雨疎しぐれまばらに降り来たりぬ。その軽き一滴二滴に打たれて梢こずえより落つる木の葉はの風なきにひるがえるさまを青年わかものは心ありげにながめたり。時雨しぐれの通りこせし後は林うちの中うちしばし明るくなりしが間もなくまた元の夕闇ゆふやみほの暗くきありさまとなり、遠方おちかたにて銃つつの音かすかに聞こえぬ。青年わかものは身を起こしてしばし林の中うちをたどりしが、直みちに路みちにはいはず、路ちまたに近けれど人目に隠るる流れの傍かたわらにいでたり。こはかれが家の庭を流れてかの街ちまたを貫くものとは異なり、遠き大川より引きし水道たぐいの類たぐいゆえ、幅は三尺に足らねど深ければ水層みずかさ多く、林を貫く辺あたりは一直線に走りて薄暗はくあんきかなたより現われまた薄暗はくあんき林の木陰こかげに隠れ去るなり。村の者が野菜洗うためにとてこの流れの幅をことさらに広く掘

り、小さき入り江をなせる、いつもかれが好みて訪い来るところにいで落ち葉を敷きつ、茅ちがや野やばら、小笹おささの類たぐい入り乱れし藪やぶ叢ぶを背にしてうづくまり、前には流れの音もなく走るをながめたり。

熱ねつ沙しゃ限りなきサハラを旅する隊商も時々は甘き泉わき緑の木陰涼しきオーシスに行きあいて堪たえ難がたき渴かわきと死ぬばかりなる疲つか勞れを癒いやする由あれど、人生まれ落ちての旅路たびじにはただ一度、恋ちよう真清水ましみずをくみ得てしばしは永とこしえ久えの天を夢むといえども、この夢はさめやすくさむれば、またそのさびしき行程みちにのぼらざるを得ず、かくて小暗おくらき墓の門に達するまで、ついに再び第二のオーシスに行きあうことなく、ただ空むなしく地平線下に沈みうせぬるかの真清水ましみずを懐おもうのみ、げにしかり、しかしてわれ今、しいて自らこのオーシスに分かれんとす、しいて自らこの夢を破らんとす。これまことにわれの堪うえ得べべき事なるか。恋の泉はいつもいつもわきて流れ疲れし人をまでど、この泉の濤ほとりにて行きあう年若き男女の旅人のみは幾度か幾度か代わりゆき、かつ若者に伴おとめいし乙女初めは樂しげにこの泉をくめどたちまちその手を差しいれてこれを濁し、若者をここより追いやりつ、自己おのれもまたあえぎあえぎその跡を逐おうて苦くしき熱あつきさびしき旅路にのぼる。わが友の上にもこの事あり、わが読みし文ふみの中うちにもこの事多し。されど治子は一度われをこの泉の濤ほとりに導ほきしより

ふたとせ
 二一年に近き月日を経て今なおわれを思いわれを恋うてやまず、昨夜の手紙を読むものた
 れかこの清き乙女を憐まざらん。しかしてわれ今、しいて自らこの乙女を捨てて遠く走ら
 んとす。この乙女を沙漠の真中にのこしゆかんとす。これまことにわれの忍び得ることな
 るか。

われ近ごろ、猛き獅子と巨蟒と、沙漠の真中にて苦闘するさまを描ける洋画を見たり。

題して沙漠の悲劇というといえどもこれぞ、すなわちこの世の真相なるべきか。げにこの
 われなき世こそ治子の眼にはかくも映るなるべし。しかしてわれはいかん、われはいかん。

青年は恋を想い、人の世を想い、治子を想い、沙漠を想い、ウオーシスを想い、想い
 は想いをつらねて環り、深き哀しみより深き悲しみへと沈み入りぬ。風の音は人の思いを
 遠きに導き、水の流れは人の悲哀を深きに誘う。かれが前なる流れは音もせで淀みなく
 走るを、初めかれ心なくながめてありしが、見よ、水上より流れ来たる木の葉を、かれ
 はひたすらながめ入りぬ。紅の葉、黄色の葉、大小さまさまの木の葉はたちまち木陰より
 走りいでてまた木陰にかくれ走りつ。たちまち浮かびたちまち沈み、回転りつ、ためらい
 つす。かれは一つを見送りつまた一つを迎え、小なるを見失いては大なるをまてり。かれ
 が心のはげしき戦いは昨夜にて終わり、今は荒寥たる戦後の野にも等しく、悲風慘雨

ならび至り、力なく光なく望みなし。身も魂も疲れに疲れて、いつか夢現の境に入りぬ。

林あり。流れあり。梢よりは音せぬほどの風に誘われて木の葉落ち、流れはこれを浮かべて走る。青年あり、外套の襟に頸を埋め身を縮めて眠れる、その顔は蒼白し。四辺の林もしばしはこの青年に安き眠りを借さばやと、枝頭そよがず、寂として音なし。流れには紅黄大小かずかずの木の葉、たちまち来たりたちまち去り、緩やかに回転りて急に沈むあり、舟のごとく浮かびて静かに流るるあり。この時東の空、雲すこしく綻びて梢の間より薄き日の光、青年の顔に落ちぬ、青年は夢に舟を浮かべて清き流れを下りつつあり、時はまさに春の半ばなり。左右の岸は新緑の光に輝き、仰げば梢と梢との間には大空澄みて蒼く高く、林の奥は日の光届きかねたれど、木の間木の間よりもるる光はさまざまの花を染め出だし、涼しき風の枝より枝にわたるごとに青き光と黒き影は幾千万となき珠玉の入り乱れたらんごとく、岸に近き桜よりは幾千の胡蝶一時に梢を放れ、高く飛び、低く舞う。流れの淀むところは陰暗く、岩を回れば光景瞬間に変じ、河幅急に広まりぬ。底は一面の白砂に水紋落ちて綾をなし、兩岸は緑野低く春草煙り、森林遠くこれを囲みたり。岸に一人の美わしき少女たたずみてこなたをながむる。そのまなざしは治子に肖

てさらに気高く、手に持つ小枝をもて青年を招ぐさまはこなたに舟を寄せてわれと共に恋の泉をくみたまわずや、流れ流れていずこまでゆかんとしたもうぞ、流れの末は波荒き海なるをと見えるがごとし。流れの末を打ち見やれば春霞たなびきたり。かれはしばしためらいつ、言い難き悲哀胸を衝いて起こりぬ。少女は見て、その悲哀を癒す水はここにありと、小枝を流れに浸しこなたに向かいて振れば、冷たき沫飛び来たりて青年の頬を打ちたり。春の夢破れぬ。

風起こりて木の葉あらしく鳴りつ、梢より落つる滴りの落ち葉をうつ音雨のごとし。かれは静かに身を起こし、しばらく流れをみつめてありしが、心はなお夢路をたどれるがごとく、まなごしは遠き物をながむるさまなり。外套のポケットに差し入れし手先に触るる物あるをかれは堅く握りて眼を閉じつ。

この時犬高くほえしかば、急ぎて路に出で口笛鋭く吹きつつ大股に歩みて野の方に向かい、おりおり空を仰ぎては眉をひそめぬ。空は雲の脚はやく、絶え間絶え間には蒼空の高く澄めるが見ゆ。

青年は絶えずポケットの内なる物を握りしめて、四辺の光景には目もくれず、野を横ぎり家路へと急ぎぬ。ポケットの内なるは治子よりの昨夜の書状なり。短き坂道に來たりし

時、下より騎兵二騎、何事をか声高に語らいつつ登りくるにあいたれどかれはほとんどこれにも気づかぬようにて路をよけ通しやりぬ。騎兵ゆき過ぎんとして、後なる馬上の、年若き人、言葉に力を入れ『……に候そろあいだ間ま至急、「至急」という二字は必ず加えざるべからず』と言うや、前なる騎兵、『無論、無論……』と答えつ、青年わかものの耳たてし時は二騎の姿すでに木立ちにかくれて笑う声のみ高く聞こえたり。青年はさらに路をいそぎぬ。

*

*

*

*

——停車場ばの時計、六時を五分過ぎ、下りの汽車を待つ客七、八人、声立てて語るものなければ寂寥さびしさはひとしおなり。ランプのおぼつかなき光、隈々くまぐまには届きかねつ。大空晴れて星の数もよまるるばかりに、風は北よりそよぎて夕暮れの寒さに人々は身をちぢめたり。発車にはなお十分を待たざるを得ず。

この時切符を売りはじめしかば、人々みな立ちて箱の前に集まりし時、外ほかより男女なんによぶ二人の客、静かに入り来たりぬ。これ松本治子と田宮峰二郎なり。青年は切符を買いて治子に渡し、二人は人々に後おくれてプラットフォームかたの方かたに出いで、人目を避くるごとく、かなたなる暗きあたりを相並びて歩めり。治子はおりおり目にハンケチをあてて言葉なし。青年

は窮きわみなき空高くながめ、胸さくるばかりの悲かなしみ哀をおさえて、ひそめし声に力を入れ、

『必ず手紙を送りたまえ、今こそわが望みは君が心なれ。』

慷こうがい慨がいに堪たえざるものごとく、『君を力にてわが望みは必ず遂げん。』熱き涙一滴、

青年が頬ほをつたいしも乙女おとめは知らず。ハンケチを口にくわえて齒をくいしばりぬ。しばし

二人は言葉なく立てり。汽笛高く響ひびきし時、青年は急ぎ乙女の手を堅く握り、言わんとし

て言うあたわず、乙女がわずかに『御身おんみを大切に』と声もきれぎれに言うや『君こそ、君

こそ、必ず心たしかに忍びたまえ、手紙を忘れたもうな。必ず……。』

青年はその夜、十時ごろ茅屋くさやに帰りぬ。筆を走らして、おりおり嘆ためいき息つきつつ、

『われ君を思い断たんともがきはげに愚かの至りなりき。われ君を思うこといよいよ深くしてわれますます自ら欺かんと企てぬ。思い断ち得てしかして得るところは何ぞ、われにも君にも永ながくいやし難き心の傷なるべし。しかしてわがいわゆる天職なるもの果たして全く遂げらるべきや。ああ愚かなる。げにわが血は荒れて事業事業と叫ぶ声のみぞいたずらに高く、その声の大なるに自ら欺かれてわれに限りなき力ありと思いき。』

この時、風一陣、窓に近くりこき栗こずえの梢もを魔ものありて揉もみしようなる音す。青年は筆を止めて耳傾かくるさまなりしが、

『わが力いずこにありや。口濁かわきし者の叫ぶ声を聞け、風にもまるる枯葉こようの音を聞け。君なくしてなお事業と叫ぶわが声はこれなり。声かれ血か涸れ涙なみだ涸れてしかして成し遂ぐるわが事業こそ見物みものなりしに。ああされど今や君はわが力なり。あらず、君を思うわが深き深き情けこそわが将来ゆくすえの真の力なれ。あらず。われを思う君が深き高き清き情けこそわが将来ゆくすえの血なれ。この血は地の底を流るる春の泉なり。草も木も命をここに養い、花もこれより開き、実を結ぶもその甘き汁はすなわちこの泉なり。こは詩的形容にあらず、君よ今わが現に感ずるところなり。

昨夜までは、わが洋行も事業の名をかりて自ら欺く逃走なりき。かしこは墳墓おどなりき。今やしからず。今朝けさより君が来宅までわが近郊の散歩は濁水暫時地を潜くぐりし時のごとし。こはわが荒き感情の漉こされし時なり。再び噴出せし今は清き甘き泉となりぬ。われは勇みてこの行に上るべし。望みは遠し、されど光のごとく明るし。熱血、身うちに躍おどる、これわが健康しるしの徴しるしならずや。みな君が賜たまものなり。』

青年まなこの眼は輝まなこきて、その頬ほおには血のぼりぬ。

『されば必ず永久とこしえの別れちよう言葉を口にしたもうなかれ。永久の別れとは何ぞ。人はあまりにたやすく永久とこしえの二字を口にす。恐ろし二字、厳おごそかなる二字、人を生かし人を殺

す二字。永久の望み、永久の死、人はこの両極に呼吸す。永久の死なき者に永久の別れありや。されど死という一字は人容易に近づきて深く感ずるを得ずといえども、別れの一字は人々の日々親しく感ずるがゆえに、もし人、この一字に永久の二字を加えて静かに思いきわめなばその胸さけん。君とてもしかり。これわれと永久とこしえに別れて無究に相見ず、われは北極の氷と化し君は南極の石となりて、感ぜず思わず、限りなく相見ずと思いたもうともなお忍びたもうことを得るや。愛児を失いし人は始めて死の淵ふちの深きに驚き悲しむと言ひ伝う、わが知れる宗教家もしかいえり。こは誤感のみ。かれが感ずるは死にあらず、別れなり。その哀かなしみは死を悲しむにあらず、別れを悲しむなり。死は形のみ、別れは実じつなり。たれか愛と永久とこしえの別れと両立せしめ得るもので。千年万年億々年の別れを悲しまず、実に永久とこしえの別れを悲しむ。否、われは永久とこしえの別れを信ぜざるなり。愛の命はこの信仰のみ、われらが恋の望みは実にここにあり。否、君のみにあらず、われは一目見しかの旗亭きていの娘の君によく肖にたると、老い先なき水車場の翁おきなとまた牛乳屋ちちやの童わらべと問わず、みなわれに永久とこしえの別れあるものぞとは思ひ忍ぶあたわず。ああ天よ地よ、すべて亡ほろびよ。人と人とは永久とこしえに情の世界に相見ん。君よ、必ず永久とこしえの別れを軽かろ々しく口にも筆にも上のぼしたまいそ。これ実にわれの耐うるところにあらず。君を恋うることの深きによりて、

われ初めてこの深き悲哀を知り、さらに限りなきの望みと力を得たり。運命の力は強し、君とこの世にまた相見ることなかるべきやを思うだに、この心破れんとす、いわんや永とこし久えの別れをや。』

この時、夜ふけ、遠き林をわたる風の音の幽かすかに聞こゆるのみ、四辺あたりは寂せきとして声なし。青年はしばし、夢みるごときまなざし遠く、ややありて『わが夜もふけぬ。君今は静かに休みておわさん。わが心哀かなし。人々みな懐なつかし。わけても君恋し。ああたれか永とこし久えの別れというや。否、否、否……。』

かれは掌たなごころもて顔をおおい、臂ひしを机に立てつ、目の前には牛乳屋ちちや、水車場、小川流るる巷ちまた、林の奥、木の葉浮かびて流るるまつすぐの水道、美しき優しき治子、翁おきな、童わらべ、驢馬ろばに至るまで鮮あざやかに浮かび出いでしが、たちまちみな霧に包まれて消え、夢に見し春の流れの岸に立つ気高けだかき少女現おとめわれぬ。そは真まことの治子の姿とかわらざりき。

(明治三十一年十月作)

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「文芸倶楽部」

1898（明治31）年10月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年7月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

わかれ

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>